

ひょうごJCC

兵庫県協同組合連絡協議会機関誌

coop

102

2026. 3. 26

兵庫JCCは兵庫県内の生協、JA(農協)、JF(漁協)、JForest(森林組合)の協同組合組織相互の連絡提携、共通課題の実行および全国、海外の協同組合運動との連携を図ることを目的に、1984年7月7日に設立されました。

「人とひとの心がふれあう、暮らし良い兵庫を目指して一協同が息づくまちづくり」を基本理念として、共通行動目標の実践に取り組んでいます。

- 1. 協同組合活動スナップ 1
- 2. 2025年度「虹の仲間づくりカレッジ」を開催 2
 - 各班の取り組み 3
- 3. 2025年度兵庫県生協大会を開催 4
- 4. 兵庫JCC協同組合研究・交流会を開催 5

Contents

- 5. 今協同組合では一各協同組合からの報告一
 - JA(農協) / 生協 6
 - JForest(森林組合) / JF(漁協) 7
- 6. 協同組合運動に生きる
 - 兵庫県漁業協同組合連合会 専務理事 田中 稔彦 8

● ● ● 協同組合活動スナップ ● ● ●

「1.17 ひょうごメモリアルウォーク2026」が開催されました



生協

1月17日「震災を風化させない-『忘れない』『伝える』『活かす』『備える』『繋ぐ』」をテーマとして「ひょうご安全の日のつどい」が実施されました。その一環として、「1.17ひょうごメモリアルウォーク2026」が開催され、参加者は震災当時に思いを馳せ、また、防災意識を新たにしながら、みなとのもり公園からHAT神戸なぎさ公園までの約4キロの復興した街並みを歩きました。

兵庫県立農業大学校と合同でJA事業説明会を開催



JA(農協)

J A兵庫中央会は、1月28日に兵庫県立農業大学校とJA事業説明会を開催し、農業大学校の学生32名が参加しました。学生はJAの各ブースに分かれ、採用担当者から組織概要や地域農業の特徴、事業の内容等について説明を受け、積極的に質問を寄せていました。

「うみまっぶひょうご」運用開始しました!



JF(漁協)

兵庫県内で開催される「環境」や「海」に関するイベント情報をひと目で確認できる情報掲示板アプリ「うみまっぶ ひょうご」の運用が開始されました。無料で閲覧でき、日付順の一覧表示や開催エリアをマップで確認できるため、参加したいイベントを手軽に探すことができます。ぜひご利用ください。

日本伐木チャンピオンシップに参加しました



JForest(森林組合)

2025年10月18日、19日に開催されたJLC(日本伐木チャンピオンシップ)に北但西部森林組合の5名が出場し、日ごろの練習の成果を発揮しました。この大会は世界大会の選考も兼ねており、日本のトップ選手が一堂に会した熱い大会となりました。

●編集発行

兵庫県協同組合連絡協議会(兵庫JCC)
Hyogo-ken Joint Committee of Co-operatives
生協・JA(農協)・JF(漁協)・JForest(森林組合)

●兵庫JCC事務局

兵庫県生活協同組合連合会 TEL(078)894-3207
兵庫県農業協同組合中央会 TEL(0794)87-0062
兵庫県漁業協同組合連合会 TEL(078)940-8013
ひょうご森林業協同組合連合会 TEL(078)599-7461

2025年度「虹の仲間づくりカレッジ」を開催

兵庫 J C C では、協同組合の次代を担う職員同士が集い、学習と交流を通して、協同組合が地域社会の中で果たすべき役割についてともに考えることを目的に、2015 年度から「虹の仲間づくりカレッジ」を実施しています。

2025 年度「虹の仲間づくりカレッジ」は全 3 回の講座で開催し（第 1 回：8 月 5 日～6 日、第 2 回：9 月 18 日、第 3 回：2 月 19 日）、各協同組合の若手・中堅職員等 17 名が参加しました。

国連が定める S D G s を踏まえ、生産段階や環境・地域のコミュニティなどが抱える課題を協同組合としていかに解決するかをテーマに、協同組合が連携してどのような取り組みができるかを参加者が話し合い、打合せを重ねて、実践活動を 11 月～1 月にかけて行いました。

2 月 19 日には最終回として各チームがそれぞれ実践した活動について発表しました。各チームが企画した活動内容、成果や課題等について報告し、動画を再生したり、成果物を展示するなど各チームともに工夫を凝らしながら発表が行われました。発表後はお互いの感想や気になった点について質疑応答が行われました。

また、総括として兵庫 J C C 各幹事からコメントを述べ、これからの協同組合間協同について意見を交わしました。

受講者からは、「同じ協同組合として力を合わせて取り組むことができた」「他の協同組合の活動内容を知ることができてよかった」などの感想が寄せられました。



実践した活動について発表する参加者



「虹の仲間づくりカレッジ」を受講した感想について発表する参加者

○ 各班の取り組み

①『知っとお？協同組合』

『知っとお？協同組合』では、若者が協同組合に興味をもち、未来につながる小さな「行動変容」を起こすことを目的に、11月11日に「未来に向けたSDGsアクション2025」を開催しました。チームメンバーよりIYC2025や未来に向けたSDGsアクションと題して各協同組合の取り組みについて説明した後、グループごとに意見交換を行い、発表を行っていただきました。

参加者からは「国産の食材を意識して買うようにする」、「協同組合の意義や取り組みについて理解できた」などの感想があがりました。



各協同組合の取り組みについて説明

②『Team HIGASHINADA♡』

『Team HIGASHINADA♡』では、放置竹林問題への取り組みを広めていくため、「甲南大学 Bamboo Thank you Project」と連携し、1月31日に「ばんぶーでつくってあそぼ!」を開催しました。このイベントを通じ、広い世代に放置竹林問題を含めた環境問題について知ってもらい、さらに、竹を入口に協同組合の取り組みへの関心を持ってもらいました。

イベントでは竹灯籠や竹ストラップづくりなどのワークショップやパネル展示などを行い、参加者からは「放置竹林問題が深刻化であると同時に今後自分でできることはないか考えさせられた」、「放置竹林問題について興味がわいた」などの感想があがりました。



竹ストラップづくりの様子

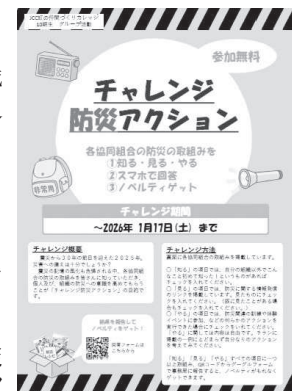


③『チャレンジ防災アクション』

『チャレンジ防災アクション』では、2025年が阪神・淡路大震災から30年、戦後80年そして国際協同組合年であることから、職員一人ひとりが一歩進んだ防災対策を実行するきっかけをつくることを目的に、12月1日から1月17日まで「チャレンジ防災アクション」と題して、今年度のカレッジ生やチームメンバーの組合にて個人個人で防災の取り組みを実践しました。「知る」、「見る」、「やる」の3つに分けて防災に取り組み、取り組み内容についてとりまとめました。

実践した参加者からは「他組織の取り組みを知って刺激を受けた」、「鳥根県・鳥取県で発生した地震がより意識を高めた」などの感想があがりました。

チャレンジ防災
アクションのチラシ



④『チームもぐもぐ』

『チームもぐもぐ』では、各協同組合が地域の若年層と繋がるために協同組合間連携を通して参加者の健康意識を高めることを目的に11月15日に「もぐもぐカレッジ」を開催しました。このイベントでは自分がどのくらい野菜を食べているか数値で測るベジチェックや骨チェック、食育ワークショップ、親子クッキングなどを行い、参加者の健康意識を高めるきっかけを作りました。参加者からは、「健康意識が高まった」、「三色食品群を意識した食事をつくりたい」などの感想があがりました。



骨チェックについて解説

2025年度兵庫県生協大会を開催

テーマ

つながる力で未来を拓く^{ひら}

～平和で持続可能な社会の実現～

10月23日、神戸サンボーホールにおいて、2025年度兵庫県生協大会を開催し、会員生協の組合員や役員、職員など313人が集いました。

第1部記念式典は、生活クラブ生活協同組合都市生活 藤原あゆみさんの司会で始まり、主催者を代表して兵庫県生協連 岩山利久会長理事が挨拶。引き続き、ご来賓の兵庫県県民生活部長 田中序生様、神戸市地域協働局副局長 服部星次様より表彰者と生協への期待がこめられた祝辞をいただき、兵庫県議会副議長 大豊康臣様からもお祝いのメッセージを頂戴しました。



「生協功労者表彰」受賞者

続いて行われた表彰式では、長年にわたり生協の発展に寄与された会員生協役員1人に生協功労者表彰として「兵庫県知事感謝」が贈られました。

また、生協業務に精励した27人に「兵庫県生活協同組合連合会会長表彰」が贈られました。

第2部では、阪神医療生活協同組合阪神漢方クリニック 薬剤師の福田裕子氏の講演「季節の食養生～夏の疲れを整える 秋と冬に備えて～」、落語家・天台宗道心寺住職 露の団姫氏による落語と講演「一隅を照らす～自分らしく輝く秘訣～」のステージの催しが行われました。

また、国際協同組合年を記念して開催規模を拡大し、会場には兵庫県生協連の会員生協や、兵庫JCCなど協同組合関連組織などによる12のブースが出展されました。試食、防災やくらしの安心のための体験、健康チェックなどを通して、各団体の取り組みを紹介しました。



福田裕子氏



露の団姫氏



生協グループ



JA 兵庫中央会



JF 兵庫県漁連



ひょうご森連

兵庫JCC協同組合研究・交流会を開催

兵庫JCCでは、異なる協同組合組織が互いの事業・活動を理解し、今後の協同組合間連携の更なる促進を図ることを目的に、『兵庫JCC協同組合研究・交流会』を2008年から毎年開催しています。2025年度は、「漁業」について理解を深めてもらうため、2月5日に神戸市内で開催し、各組織から組合員・役職員計37人が参加しました。

当日は、神戸市須磨区にある「すまうら水産のり工場」において、若林良取締役代表より海苔養殖について説明いただいた後、工場の見学を行いました。また、「Suma 豊かな海プロジェクト」をはじめとする、地域活動についてもご紹介いただきました。

続いて、神戸市漁業協同組合に場所を移し、セリの見学を行いました。

その後、兵庫県漁連指導部 坂口建主任より「豊かな海づくりの取組」、神戸市漁業協同組合 山田智昭組合長より「シラス漁の方法と組合が行うチリメン加工」について説明をいただきました。

最後に兵庫県漁連 田中稔彦専務理事の進行による意見交換会を実施し、海の栄養塩減少の要因や消費者にできる取り組み等について活発な意見が交わされました。参加者からは、「見て・聞いて・食べて・考えて・話す」構成の交流会により、水産業の現状や課題への理解が深まり、自組織の取り組みと重ね合わせて考える貴重な機会となったとの声が多く寄せられ、有意義な交流の場となりました。



今 協同組合では —各協同組合からの報告—

JA(農協)から

山下 晃さん (JA兵庫西) 最優秀 (兵庫県知事賞) を受賞 ～営農指導員が日頃の活動成果を発表～

JA兵庫中央会とJA全農兵庫は2月24日、県農業会館(神戸市)で、JA営農指導員発表大会・担い手活動成果発表会を開催しました。JA営農指導員等が日頃の活動成果を発表し相互研さんを図ることを目的に、関係者ら117人が参加し、県内8JA8人の代表者が発表しました。最優秀の兵庫県知事賞には、「地元企業と連携した資源循環型農業の実現 ～本当の持続可能性はここにある～」と題して発表したJA兵庫西の山下晃さんが選ばれました。

JA兵庫西管内のたつの市では、醤油麴の良品質な原料となる小麦・大豆生産が盛んですが、後継者不足や資材高騰に加え、地力維持のための牛糞堆肥散布に労力がかかるという課題に直面していました。山下さんは原料の供給先である地元企業の醤油メーカーで醸造工程に発生する副産物「発酵諸味粕」に着目し、「発酵諸味粕」を堆肥化したASKを牛糞堆肥や化学肥料に代えて使用する栽培方法を関係機関と一体となって試験・推進した成果について発表しました。審査委員長である兵庫県立農林水産技術総合センター 堀川道信次長の講評では、生産者の労力軽減だけでなく、地元企業と連携した地域資源の循環や化学肥料の削減による環境負荷低減など農業の持続可能性にもつながる活動である点が高く評価されました。

また、講演では、農業タレントの田中さきさんから「農業の面白さとJA職員に求める支援」と題して、農業のイメージを変えるためにSNSで発信されている活動やJA営農指導員との心温まるエピソードが紹介されました。

他の受賞者は次の通りです。

- 県中央会会長賞 = JA兵庫六甲・藤山奈美香さん
- 全農兵庫県本部長賞 = JA兵庫南・笹倉あかねさん



生協から

第21回 新春トップセミナー・賀詞交換会開催

1月10日、湊川神社 楠公会館において、「第21回 新春トップセミナー・賀詞交換会」を開催しました。兵庫県の消費者行政の皆様や、共栄火災海上保険株式会社、会員生協・団体の役員と職員、あわせて43人の方々にご参加いただき、新年の決意を新たにする機会となりました。

新春トップセミナーでは岩山利久会長理事の開会挨拶に続き、兵庫県 県民生活部長 田中 序生様からご挨拶をいただきました。講演会としまして関西大学商学部商学科流通専修 教授 杉本貴志氏から「協同組合のくらしや地域社会に対する役割～これからの協同組合に期待すること～」と題して講演いただきました。杉本先生からは、協同組合のはじまりから今後の在り方まで、終始丁寧にわかりやすくお話をいただき、時には笑いも織り交ぜながら、ご講演いただきました。最後に地域との向かい合い方として、生協単独ではなく、地域を巻き込んだ解決が求められるなど、協同組合として今後も視野を広げてもらいたいと述べられました。その後開催された賀詞交換会では、日頃からお指導いただいている行政の方々や、友誼団体、会員生協・団体の皆さまが交流を深めました。



講師 杉本 貴志
関西大学商学部教授



田中 序生 兵庫県
県民生活部長



岩山 利久 会長理事

JForest(森林組合)から

「林業技能検定」が創設されました

2024年8月29日に厚生労働省により関係省令が改正され、技能検定に農林水産業で初めて「林業」が職種追加されました。技能検定は、働く人々の有する技能を一定の基準により検定し、国として証明する国家検定制度で、個人がもつ技能に対する社会一般の評価を高め、働く人々の才能と地位の向上を図ることを目的として行われています。

試験内容は、学科試験と実技試験があり、造林・育林・素材生産作業など、林業に関する幅広い知識と技能が求められます。特に実技試験では、実際にチェーンソーを用いて行う作業だけでなく、写真やイラストにより、対象物の状況を判断する内容や保護具等が安全で正しく装備できているか等も厳しくチェックされます。

受検区分は実務経験に応じて、1級、2級、3級がありますが、2025年度までに全国で延べ約1,000名が受験し、合格者は約150名と非常に狭き門（1級の令和7年度合格率は約10%）ですが、今年度は北但西部森林組合の森林技士が1級に2名、2級に2名、合格しました。

本技能検定制度が広く普及することで、技能の向上が図られ、林業作業の質が確保されるだけでなく、林業における労働安全の確保にも繋がるのが期待されます。



検定の様子①



検定の様子②

国家検定（職業能力開発促進法）
林業技能検定
＜1級～3級＞

<< 林業団体は、「技能士」育成にとりくんでいます。 >>

2025林業技能検定 受検申請終了（717名申請）

- 国家検定に
トライ
- 資格・検定は林業の
技能・知識を再確認！
- チェーンソーワークでの
安全作業を再確認！

厚生労働大臣指定試験機関
★技士のメリットは
見聞き費をご覧下さい

FSIC
一般社団法人 林業技能向上センター

林業技能検定のチラシ

JF(漁協)から

第11回 Fish-1 グランプリで「大日本水産会会長賞」受賞

第11回 Fish-1 グランプリに向けて、兵庫県漁連と兵庫県女性連が連携し、兵庫の地魚の魅力为全国へ発信することを目指して、レシピの検討と試作を重ねました。

兵庫県の瀬戸内海沿岸ではタコを柔らかく煮付けた「タコの柔らか煮」が古くから食され、特に明石市周辺ではブランド魚である明石ダコを、各家庭のレシピで柔らか煮に調理し定番のおかずとして親しまれてきました。今回はこの郷土料理の味を握り寿司にアレンジした「明石だこのやわらか煮握り寿司」を考案しました。

また、明石鯛・明石ダコに並ぶ明石の三大名産品の一つである穴子は、焼き穴子の巻き寿司として地元で長く愛されてきました。焼き穴子は家庭での食卓だけではなくお客様が来られた際や大切な方への手土産として用いられてきました。関西では穴子は焼き穴子が主流ですが、今回は焼きを浅くし、さらに天ぷらにすることで旨味を凝縮させながらもふわっとした食感に仕上げ、伝統の味を新たなレシピで生まれ変わらせた「あなごの天ぷら巻き寿司」を完成させました。

浜の郷土料理を大切にしつつ、女性部ならではの視点で作上げた2品は、全国から寄せられた応募作品の中から最終審査へ進出し、11月30日に東京都・日比谷公園で開催された同グランプリに出場し、当日は兵庫県漁連と女性部員が一体となって600食を販売しました。その結果、見事「大日本水産会会長賞」を受賞しました。



協同組合運動 に生きる

漁業における三つの防人

兵庫県漁業協同組合連合会 専務理事 田中 稔彦



近年、世界情勢の変化や地球規模の環境問題は大きく様変わりし、食糧や資源を安定して確保していくことは、私たちの暮らしを支えるうえで重要な課題となっています。漁業を取り巻く環境もまた、資源の減少や担い手不足など厳しさを増し、さまざまな課題が顕在化しています。

本稿では、こうした視点から、漁業が果たすべき「三つの防人」の役割について述べたいと思います。

I. 食糧安全保障の必要性 ～食糧供給産業としての防人～

日本の漁業は200海里以後、遠洋・沖合漁業の減船、沿岸漁業は漁場の喪失と資源の減少により、漁業生産量は1200万トンから600万トンへ減少し水産物の自給率も約52%に降下します。

さらに、食糧供給における全体の自給率はカロリーベースで38%となり、世界中から食料を買い集めることとなります。

しかし、近年の食糧事情は、自然災害や干ばつ、新興国の需要増および投機資金の流入、為替相場(円安)などで高騰しており、環境問題、エネルギー資源などと同様に地球規模の問題となっています。

また、食糧問題は国家間において場合によっては外交上の武器にもなることから、食糧安全保障における取組みが必要です。

このような中、水産業は食糧の安定供給を確保していくうえで防人の役割を果たす必要がありますが、現在の水産業にはかつて自給率110%を越えていたときのような生産力を持っていません。ここまで水産業が疲弊してしまった経営悪化の要因は、輸入水産物の自由化、規制のない原油投機および流通における価格転嫁が不可能であることなど外部に原因があります。

農業では、欧州連合(EU)が所得の約7～8割を政府が直接支払いで補てんしています。水産業にあっては、未来永劫の補てんを求めるのでは無く自給率が上昇するまでの間、産業としての基盤強化はもとより食糧供給産業における国民の食を守る防人として役割を担うためにも国の施策が求められます。

日本の排他的経済水域は広く世界三大漁場にも含まれ、海岸線は世界第6位の長さを誇り、瀬戸内海など沿岸の豊かな漁場が形成されており、かつては水産物の自給率が110%を超えていたことから、国家的な規模により水産基盤の整備が行われることにより自給率の上昇は可能です。

II. 循環型社会における環境保全 ～海洋環境の防人～

1970年代、2次産業の発展に伴う工場建設用地として沿岸部の埋め立てが行われたことから水産資源に必要な藻場・干潟の消失、また、都市や工場からの廃水による水域の汚染、河川からの過度の取水による流入水の減少、ダムなどによる土砂流入の減少などの開発により漁場は荒廃します。

一方で、瀬戸内海では富栄養化対策として、瀬戸内海洋保全措置法の制定による規制強化が図られたことから、見た目のきれいさは取り戻しましたが、生物が息息するのに必要な窒素・リンが削減され貧栄養化現象が起きています。

このような漁場環境において、兵庫のノリ養殖は、秋目網と冷凍網による2期作のノリ生産が主流でしたが、近年、色落ち減少が恒常化していることから1期作の生産が多くなっており、漁船漁業においても小型底びきなどの漁獲量が減少しています。

これらの対策として、漁業者は海底耕耘、ため池のかいほりによる水放流、漁業者が森林を育てる森づくりなど山川海を含めた回復に加えて、陸から海への栄養塩供給の促進として、河川水放流や下水処理管理運転を行政に要望するなど豊かな海の再生に連携して取り組んでいます。

日本海においても、兵庫のズワイガニ漁獲量は、1975年頃から減少がはじまり、1993年には過去最低を記録しましたが、漁期の短縮、漁期の制限、休漁期の海底清掃等資源管理の取組みや保護礁の設置などにより驚異的な回復傾向を示すこととなります。

このように、漁業者は海洋環境保全・水産資源の持続的な活用などの取組みにおいて海洋環境の防人の役割を果たしています。将来にわたり、漁場環境の保全や水産資源の豊かな再生が継続していくように、瀬戸内海においては新たな法整備、日本海においては日本だけでなく国際的な操業秩序や資源管理体制の確立が急務です。

III. 海上救難・国境監視の必要性 ～海の防人～

日韓新漁業協定により設定された暫定水域では、韓国漁船による操業があり、資源管理の在り方も課題となっています。そのような漁場制約の中で日本漁船も国境周辺海域で操業を続けています。

こうした情勢の中、我が国のEEZや国境周辺海域における漁業活動は、単なる経済活動にとどまらない意義を持ちます。日々の操業は、海域の実効的な利用と監視機能を果たし、海難救助や不審船の早期発見など、海上の安全確保にも寄与しています。

海洋国家である日本において、漁業者の存在は地域海域の安定に資する基盤的な役割を担っています。領土・領海・EEZをめぐる問題は国益に直結する課題であり、現場で海に向き合う漁業者は、まさに「海の防人」といえます。

上記のとおり、「食糧供給産業としての防人」「海洋環境の防人」「海の防人」という漁業の3つの役割は、国民が生活を営む上で食糧、エネルギー(資源)、環境を守ることが重要であることは言うまでもなく、その役割を担う水産業への施策は国民生活の安全・安心につながるものであると考えます。